

第3章 倭人（天氏）の移動

1 呉の倭人

(1) 『魏略』

「倭人」は呉の太伯の後裔であるという。『魏略』は次のように記す。

聞其旧語、自謂太伯之後。昔、夏后少康之子、封於会稽。斷髮文身、以避蛟龍之害。今倭人亦文身、以厭水害也。 『魏略』

（訳）その旧語（昔からの言い伝え）を聞くに、自ら（呉の）太伯の後裔であるという。昔、夏后少康の子が会稽に封じられた時、断髪し、文身（入れ墨）し、蛟や龍の害を避けた。今倭人も亦文身し、以て水害（魚類等の害）を厭うなり。

『魏略』は「三世紀（弥生時代後期）」の日本列島（北部九州）の「倭人」について記述している。

この「倭人」が「現代日本人」の祖先「渡来系弥生人」である。

呉の「太伯」について『史記』は概略次のように記す。

周の太王に「太伯・仲雍・季歷」の三人の子が居た。太王は末子の「季歷」を王にしたいと思った。それを察した二人の兄は「文身（刺青）断髪」し、荊蛮の地へ行った。「呉地方」である。

「季歷」は王位を継ぎ、その二代目が殷王朝を倒して「周王朝」を樹立した武王である。「紀元前1122年」のことである。

○周王朝の王統（都……陝西省西安市）

太王…太伯

仲雍

季歷…昌（文王）…武王…成王…

□「紀元前1122年」に「武王」は殷を滅ぼして「周王朝」を樹立する。

(2) 『論衡』

「倭人」を記録した最古の史書は『論衡』であろう。

■周時、天下太平。越裳献白雉、倭人貢鬯草。 『論衡』「儒增篇」

（訳）周の時、天下は太平。越裳は白雉を献じ、倭人は鬯草を貢ぐ。

- 成王之時、越裳献雉、倭人貢暢。 『論衡』「恢国篇」
(訳) 成王の時、越裳は雉を献じ、倭人は暢を貢ぐ。
「成王」は周王朝の二代目であり、在位は「前1115年～前1106年」である。

- 「紀元前1200年」ころの「倭人」は中国の呉地方に居る。
■この「倭人」が「3世紀」には日本列島（北部九州）に渡来している。
■「倭人（渡来系弥生人）」は「中国の呉地方」から渡来している。
■「6000年前（紀元前4000年）」頃は「渤海沿岸」に居た。
■渤海沿岸からさらに南下して「前1200年」頃には呉地方に住み着いている。

2 呉越の戦いと東表の倭人

(1) 「呉越の戦い」の終焉

「前473年」に、「呉王夫差」（前495年～前473年）は越王勾践に伐たれて自殺し、呉は亡びる。「呉越の戦い」は終わる。

○南の越から攻撃を受けて呉の人々は北へ逃げる。

(2) 『契丹古伝』

『契丹古伝』は中国の奉天（現瀋陽市）のラマ教寺院にあった古文書を日露戦争の時、濱名寛祐氏が写し取り持ち帰ったもの。題名は無かったので濱名氏が『契丹古伝』と名付けた。

『契丹古伝』に「安冕辰法氏（天氏）」、「卑弥辰法氏（卑弥氏）」が出てくる。

蓋辰者古国上代悠遠也。伝曰神祖之後、有辰法謨率氏。本與東表阿斯牟須氏為一。辰法謨率氏有子、伯之裔為日馬辰法氏、叔之裔為干靈辰法氏。干靈岐為干來、二千隔海而望干來。又分為高令云。然有今不可得攷焉。其最顯者為安冕辰法氏。本出東表牟須氏、與殷為姻。讓國於賁彌辰法氏。賁彌氏立未日、漢寇方薄其先入朔巫達、擊退之。淮委氏、沃委氏竝列藩嶺東為辰守郭。潘耶又觀兵亜府闕以掣漢。

『契丹古伝』

(訳) 蓋し辰は古い国であり、上代より悠遠なり。伝えて曰く、神祖の後、辰法謨率氏有り。本（もと）東表の阿斯牟須氏と同一なり。辰法謨率氏に子有り。伯の後裔を日馬辰法氏といい、叔の後裔を干靈辰法氏という。干靈は岐（わか）れて干來となり、二千里海を隔てて而して干來を見る能够である。又分れて高令となるという。然るに今はそれを考えることができない。その最も顯著なる者が安冕辰法氏である。本（もと）東表の牟須氏の出であり、殷と姻をなす。国を賁彌辰法氏に譲る。賁彌氏が立って未だ日が経たないうちに漢が攻めてきて、方（まさ）に薄（せま）り、その先朔巫達に入る。これを擊退す。淮委氏、沃委氏は並び連なり嶺東に藩（かきね）をつくり辰の守郭となる。潘耶は又亜府闕に兵を觀せ、以て漢を掣（ひきとど）む。

「辰は古い国であり、上代より悠遠なり」とある。古代中国に「辰」が存在していた。辰の「辰法謨率氏」は「東表」の「阿斯牟須氏」と同一であるという。

「その最も顯著なる者が安冕辰法氏である」という。「安冕辰法氏」は「倭人（天氏）」であり、北部九州に渡来する「渡来系弥生人」である。

「賁彌辰法氏（卑弥氏）」は「倭人（卑弥氏）」であり、「卑弥呼」の氏族である。

「安冕辰法氏（天氏）」も「賁彌辰法氏（卑弥氏）」も「辰」であり、その中の「倭人」である。

(3) 東表とは

「東表」とは中国の中原から見て「東の表（おもて）」という意味であろう。

東表は『春秋左氏伝』襄公三年（前570年）に次のように出てくる。

（魯国の）孟献子曰、以敝邑介在東表、……。 『春秋左氏伝』

（訳）孟献子曰く、弊邑（私どもの邑＝魯国）は東表に介在しているを以て、……。

魯国は東表にあるという。魯国は孔子の出た国であり、都は曲阜である。魯国を含む東方の海岸よりの地を「東表」という。（黄河と揚子江の間）（図4）

○「前473年」の「呉越の戦い」の後に「倭人」は呉地方から「東表」へ逃げてきたのであろう。

図4 東表

3 山東省の「倭人（天氏）」

(1) 山東省臨淄の「戦国時代末～前漢時代」の人骨

松下孝幸氏は中国大陸の中に弥生時代直前の人骨で「北部九州・山口タイプ」に似たものがないかを調査された。これらの調査をふまえて、松下氏は次のように述べている。

山東省（臨淄）の前漢時代（および戦国末）の人骨は北部九州・山口タイプの弥生人に酷似している。 松下孝幸氏

弥生時代に渡来してきた「北部九州・山口タイプの弥生人」は中国山東省臨淄を通って来ているのであろう。

DNAからの研究も進められている。1996年10月19日の熊本日日新聞の記事。

東大理学部の植田信太郎助教授（人類学）らは、約二千年前の中国・山東省臨淄の遺跡から出土した人骨と、同時期の弥生時代の佐賀県千代田町託田西分（たくたにしぶん）遺跡から出土した人骨のDNAを分析。遺伝子の配列

が特定の部分で同じ人がいることを確認したと十八日、佐賀県で開かれている日本民族学会連合大会で発表した。

発表者の同大学院生、太田博樹さんは「同じ配列だから祖先が一緒とはいえないが、遺伝的に祖先は近いといえる。弥生人は大陸から来たという渡來說が遺伝学的にも矛盾しないことがわかった」と話している。 熊本日日新聞

□北部九州の「甕棺墓」に埋葬された弥生人は「渡来系弥生人」である。

- 「渡来系弥生人」は中国呉地方に居た「倭人」である。
- 「渡来系弥生人」は「呉地方」から「東表」へ来て、さらに「山東省臨淄」を通って渡来している。
- それが「人骨」や「DNA」から証明された。

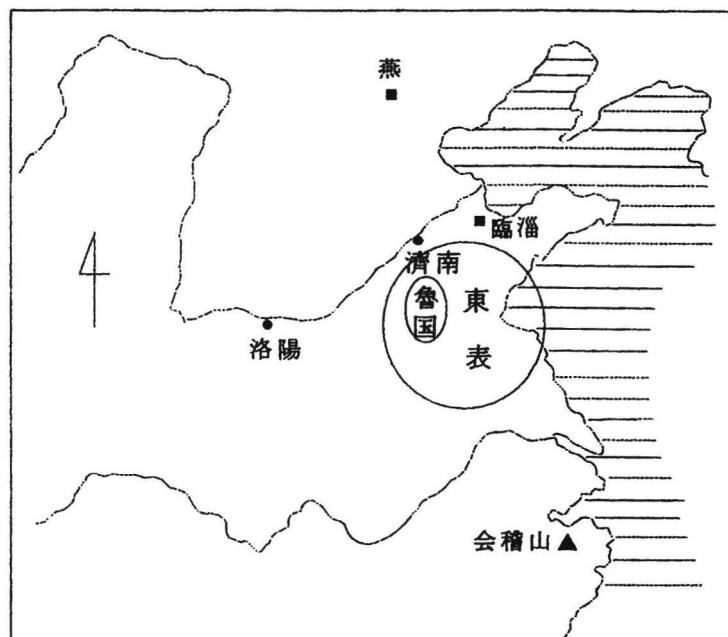


図4 東表

第4章 倭人（天氏）と箕子朝鮮（佃説）

1 箕子朝鮮

(1) 箕子と武王

「前1122年」に殷は周の武王に滅ぼされる。

「箕子」は殷王朝の宰相（総理大臣）である。

殷を倒した武王は「箕子」を訪問して教えを請う。

武王既克殷、訪問箕子。武王曰、於乎維天陰定下民相和其居。我不知其常倫所序。箕子對曰、（後略）

『史記』宋微子世家

（訳）武王は既に殷に勝ち、箕子を訪問する。武王曰く、「ああ、天は陰で定めを維持している。下民は相和し其れに居す。我は其の常倫所序（常道の秩序）を知らない」と。箕子は對（こた）えて曰く、（略）

「箕子」は武王に「鴻範九等（こうはんきゅうとう）」を教える。

(2) 箕子を朝鮮に封じる

武王は尊敬する箕子を朝鮮に封じる。

於是、武王乃封箕子於朝鮮。而不臣也。

『史記』宋微子世家

（訳）ここに於いて、武王は箕子を朝鮮に封じる。而して臣とはしなかった。

これを「箕子朝鮮」という。

武王は「箕子を朝鮮に封じる。而して臣とはしなかった」とある。

「箕子」は武王の臣下ではないから「朝鮮」は周王朝の領域外にある。

(3) 箕子朝鮮の位置

「箕子朝鮮」の位置について『呂氏春秋』に注記がある。

非濱之東 （注）朝鮮樂浪之縣、箕子所封。濱於東海也。

『呂氏春秋』卷二十

（訳）濱の東に非ず。（注）朝鮮の樂浪縣は箕子が封じられた所である。東海に濱（ひん）するなり。

○「朝鮮」は中国大陸の東海に濱しているという。

「朝鮮」の位置について『史記』は次のように記す。

燕東有朝鮮・遼東、北有林胡・樓煩、西有雲中・九原。 『史記』蘇秦列伝
(訳) 燕の東に朝鮮と遼東があり、北には林胡と樓煩があり、西には雲中と九原がある。

「朝鮮」は「燕」の東にあるという。「燕」は北京市の近くの「薊（けい）」にあった。すなわち「朝鮮」は北京市の東にある。北京の東にある海岸は「渤海」である。

□「箕子朝鮮」は「燕（北京市）」の東の「渤海沿岸」に在る。

図5 箕子朝鮮の位置

2 倭人（天氏）の移動

(1) 倭人（天氏）と箕子朝鮮の混血

『契丹古伝』は「倭人（天氏）」は「殷と姻をなす」と記す。

蓋辰者古国上代悠遠也。（中略）其最顯者為安冕辰沄氏。本出東表牟須氏、與殷為姻。 『契丹古伝』

（訳）蓋し辰は古い国であり、上代より悠遠なり。（中略）

その最も顯著なる者が安冕辰沄氏である。本（もと）東表の牟須氏の出であり、殷と姻をなす。

「殷=箕子朝鮮」である。

○「倭人（天氏）」は山東省臨淄から「箕子朝鮮の地」に移動している。

■「箕子朝鮮」から土地を与えられて「箕子朝鮮」に住み、「箕子朝鮮」と混血している。

(2) 「箕子朝鮮」と「倭人（天氏）」の混血の検証（1）

山口敏・中橋孝弘編『中国江南・江淮の古代人』（てらぺいあ、2007年）に、「殷墟の人骨」と「弥生人の人骨」とを比べて次のように記す。

華北（河南省安陽殷墟の中小墓出土人骨；韓・潘、1985年）が著しく近いのが注目される。 『中国江南・江淮の古代人』

「安陽」の「殷墟」の人骨は「渡来系弥生人=倭人（天氏）」の人骨に「著しく近い」という。（図6）

図6 弥生人からの距離の比較

（『中国江南・江淮の古代人』 p46）

□「渡来系弥生人（倭人（天氏））」が「殷墟」の人骨と著しく近いのは「箕子朝鮮

(殷) と婚姻 (混血)」しているからであろう。

(注記) 因みに「殷墟 (中国河南省安陽市にある遺跡)」は「前14世紀～前11世紀」ころの遺跡である。「渡来系弥生人」が「殷と婚姻」するのは「前300年」ころである。「1000年」も離れている。

(注) 「渡来系弥生人」にもっとも近いのは「山東省臨淄の人骨」(図6)。

□ 「倭人 (天氏)」は「箕子朝鮮」と混血していることが殷墟と渡来系弥生人の人骨の比較から立証された。

(3) 甲骨文字

河南省安陽県小屯 (殷墟) から「甲骨文字」が出土している。「甲骨文字」とは亀の甲羅や、牛の骨に刻まれた文字である。

「占いの文句」が書かれているので「卜辞 (ぼくじ)」ともいう。

甲骨に穴を開けて、真っ赤に焼けた火箸を突っ込み、ひび割れの形から吉凶を占う。これを「亀卜法」という。

藤堂明保氏は『漢字と文化』(徳間書店、昭和51年) で次のように述べている。

小屯の部落の近傍約二キロ平方にわたる地区では、殷の王を葬ったとみられる大きなお墓、宮殿および住居の基石約30ヶ所、精巧な青銅器や玉器などのほか、おびただしい数の亀甲獸骨が発見され、その総数は15万片にも及ぶであろう。それに記載された漢字は約4000種。そのうち今日までに解読されたのは約1500字ほどであろうか。

藤堂明保氏

図7 安陽県の殷墟

(藤堂明保著『漢字と文化』)

(4) 「箕子朝鮮」と「倭人 (天氏)」の混血の検証 (2)

『三国志』倭人伝は「倭人」の風俗について次のように記す。

其俗拳事行來有所云為輒灼骨而卜以占吉凶。先告所卜其辭如今亀法視火坼占兆。 『三国志』倭人伝

(訳) 其の俗、拳事行來云為する所あれば骨を灼き而してトし、以て吉凶を占う。先ずトすることを告げ、其の辞は今の亀法の如し。火坼 (かたく = 焼いた割れ目) を視て兆を占う。

中国で行われていた「亀卜法」と同じ占いを「北部九州」の「倭人」が行っている。

□「三世紀」の「北部九州」の「倭人」は「箕子朝鮮（殷）」の「龜卜法」を用いている。

- 「龜卜法」は「箕子朝鮮」から学んだのであろう。
- 「北部九州」の「倭人（天氏）=渡来系弥生人」は「箕子朝鮮」の地から「北部九州」に渡来している。
- 『契丹古伝』は、「安冕辰法氏=倭人（天氏）」は「殷と姻を為す」と記す。『契丹古伝』は史実を記録している。

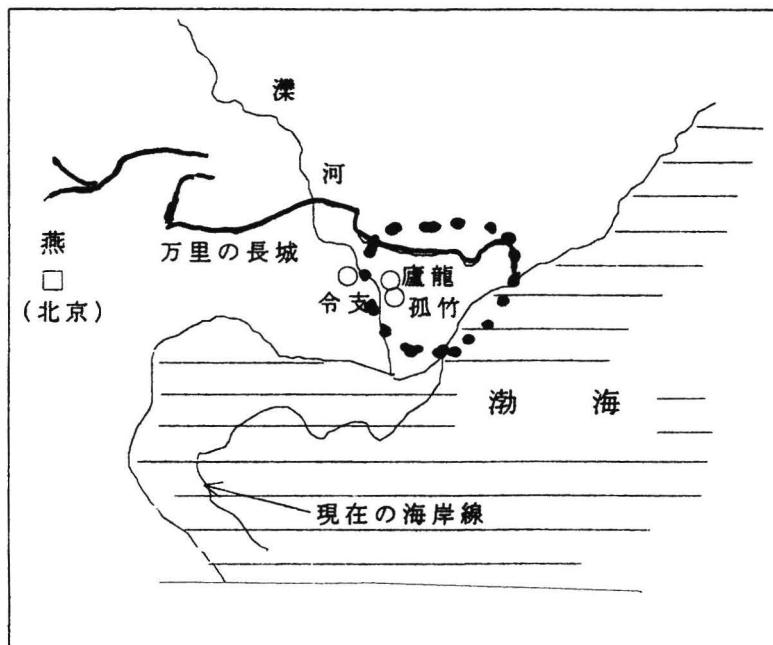


図5 箕子朝鮮の位置

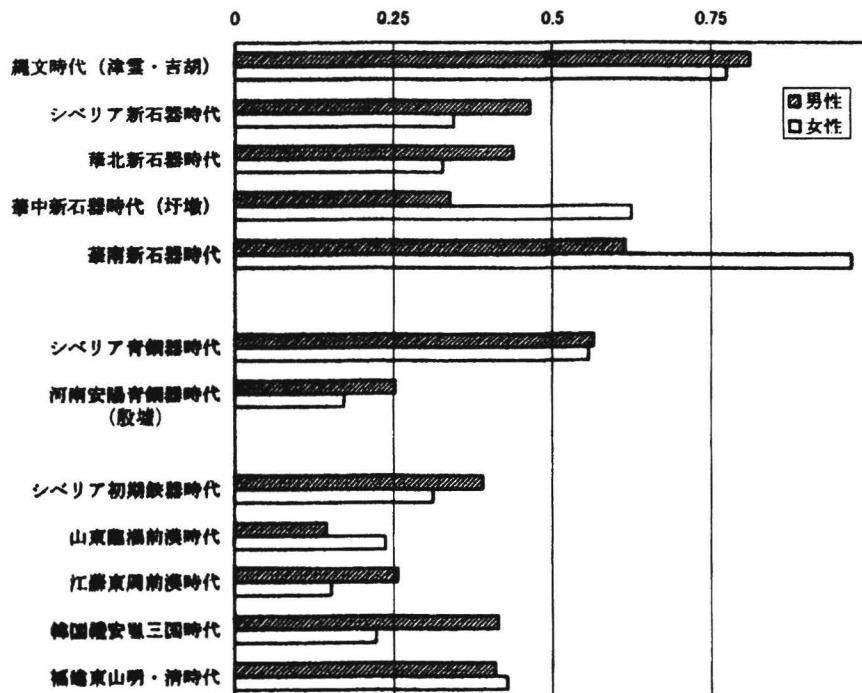


図6 弥生人からの距離の比較

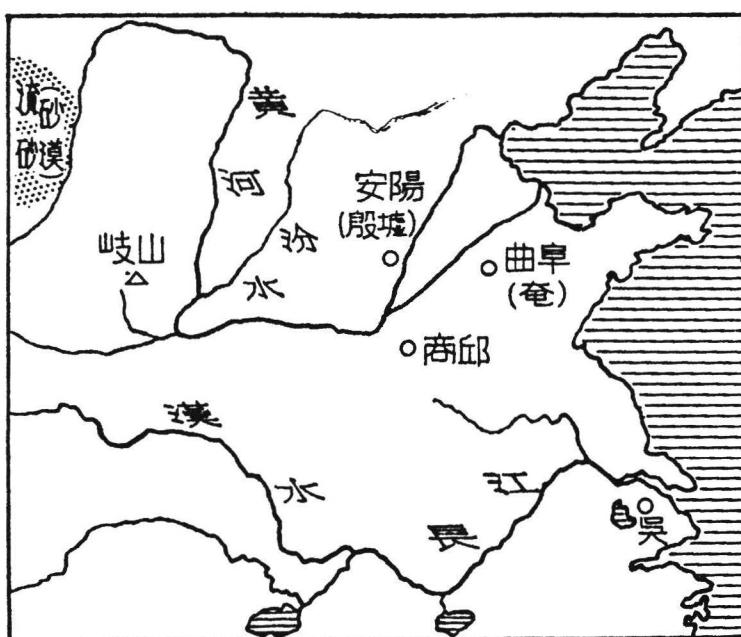


図7 安陽県の殷墟